カトリック教報

カトリック長崎大司教区
広報委員会
〒852－8113
長崎市上野町10－34
カトリックセンター内
TEL 095－843－3869
FAX 095－843－3417
振替口座 01880－5－2699
発行人
山田良秋
印刷所
株式会社 藤木博英社

西坂・日本二十六聖人殉教記念ミサ

すべての人が神の家族であると意識する殉教者たちの信仰

日本二十六聖人殉教記念ミサが2月2日（日）14時から西坂公園で行われた。この日はおよそ1300人の参加者が集まり、澄み渡った青空のもと、殉教者たちのいさおしをたたえた。ミサの主司式は髙見三明大司教が務め、中村倫明補佐司教やフィリピン・ラワン教区のレナート・マユグバ司教をはじめ、フィリピンからの司祭11人を含む50人近くの司祭たちが臨席した。また祭壇の奥には二十六聖人の一人、聖ディエゴ喜斎の聖遺物が掲げられた。

説教を務めた本原教会の古里慶史郎神父（フランシスコ会、写真）は、昨年の教皇フランシスコの訪日がフランシスコ会士たちにとっても大きな恵みの時であったことに触れながら、二十六聖人たちを神の家族・連帯の模範として強調した。「マルコ福音書に登場するヘロデ・アンティパスとヘロディア、サロメの家族が洗礼者ヨハネの首を眺めながら幸福感に浸っているグロテスクな様は、自分たちの幸福だけを追求し、他者の痛みや苦しみに無関心な者たちの姿である」と確認した上で、「キリストは群衆、特に苦しむ人や血縁の家族から捨てられてしまったような罪人や病気の人々を草原に集め、食卓を催し、彼らから始まってこの世界のすべての人を神の子として呼び集められる」ということ、そしてこれは「血縁のきずなを越えてすべてを包み込むような大きな神の家族愛を意味している」ということを説いた。さらに同師は次のように語りかけた。

「私たちも二十六聖人のような、多くの人を神の家族として招くような信仰を生きることができるでしょうか。聖ペトロ・バプティスタ神父のように、ハンセン病の方の足に接吻し、彼らに寄り添う優しさといつくしみの信仰、聖パウロ三木のように、苦しむ人々と共に歩き続け、言葉をかけ、励まし続けるような、一緒に生きていくための勇気の信仰、二十六聖人や他の殉教者の方々のように聖性の高みにまで上げられるような日々の誠実な信仰、これらはすべて、私たちみなが神の家族であるという意識に裏打ちされています。こうした生き方を、私たちも追うことができるでしょうか。二十六聖人は、それができる、と私たちに証ししてくださっています」

ミサの終わりには、400年前に日本から流れ着いたものとしてフィリピン・ラワン教区で大事にされているという聖母像のレプリカが同教区から寄贈された。

教皇さまの意向

・宣教　中国の教会が福音にたゆまなく忠実であり、一致を育んでいくことができるように

・日本　虐待被害者とその家族の苦しみを見過ごすことなく、癒やしと和解に力を尽くすことができるように

2019年度

司祭研修会 開催

接遇研修と教皇訪日を受け分かち合い

2019年度の司祭研修会が2月3日（月）から4日（火）にかけて大司教館で行われた。初日の研修は講師にフリーアナウンサーの東島真奈美氏（城山教会所属）を招いて、「気づいて、動く！―あなただからできること」というテーマで接遇研修を受けた（写真）。

講師は、心構えとして「自分はこれ以上の成長はできない」と考えず、「いつまでも成長できる」と前向きになることが大切だと語った。日々、生活の中で「より良い印象を与える接し方」を積み重ねることが大切になる。司祭は訪ねてくる信徒や一般の人に、気持ちよく伝わる言葉を使い、必要なら相手に行動を起こさせる肯定的で丁寧な声かけをすべきである。

電話の応対でも、「一つの文で一つのメッセージ」を心がけたり、声のトーンは本人が考えているよりも低く伝わっていることがある点にも気を配るように指導を受けた。

参加した司祭は、「振り返れば、面会人への応対も、電話の応対も、ぶっきらぼうであったり無愛想であったかもしれない。目標を持ち続けて、それぞれ接遇が上達するよう心がけたい。講師が強調した『伝えたいことを正しく、感じよく表現する。相手がどう受けとめるかを想像し、言葉を選ぶ。何より大切なのは〝気づく〟感性を磨くこと』にこれからも取り組みたい」と話していた。

2日目は教皇フランシスコの訪日を受けて具体的な行動を起こすためにできることを地区ごとに分かち合い、全体でまとめを発表した。最後に髙見三明大司教から典礼などさまざまな事柄に関する講話を受けて、今年度の研修を終えた。

2月5日の西坂

日本二十六聖人殉教記念日にあたる2月5日（水）は、西坂・聖フィリッポ教会と西坂公園で合わせて3回、ミサが行われた。ミサ開始1時間前からは聖堂内でゆるしの秘跡を受けることができ、多くの人々が西坂を訪れた。夕刻17時からの西坂公園でのミサは、イエズス会のドメニコ・ヴィタリ神父が主司式、古巣 馨神父（長崎大司教館）が説教師を務め、計18人の司祭と集まった信者らが、殉教記念日にふさわしい冷え込みの中、祈りをささげた。

教皇訪日を終えて――報告と反省

教皇訪日長崎実行委員長　中村 満

教皇訪日長崎実行委員会は昨年2019年3月31日に三十数名の委員で発足し、5月3日に開催された教区評議会総会の折、委員の委嘱を行った。7月28日に委員会を開催し、各担当部、予想されるボランティアの人数など主要な事項をほぼ確定した。ただ、7月上旬発表予定の公式発表が遅れ、肝心の日程と訪問地の発表がなく、最終の準備に取り掛かれず見通しが利かなくなった。

8月に入り、中央協議会の依頼によって設営、運営を担当した電通ライブが長崎入りしたが、不確定事項が多く準備に手間取った。9月1日に実行委員会を開催し、各担当などの打ち合わせを進めたが、バチカンからの公式発表は9月13日となった。発表後は、急ぎ準備に取り組んだが、駐車場の借用と受付、保安検査場所などの確保に手間取り、最後まで悩まされた。教皇様は準国賓としての来日であったが、セキュリティー上は国賓としての対応が求められ、そのため入場証や参加要項などは、再編集、再印刷となり参加申込受付の期日が予定より大幅に遅れた。参加者への送付も余裕のないものとなり、参加希望者に多大の迷惑をお掛けした。不行き届きな点が多かったことを心からお詫びしたい。10月に入って22日に委員会を開催し、最終打ち合わせを行い、当日に臨むこととした。

平和公園（爆心地）の担当とボランティアは、中地区評議会に依頼し、地区長はじめ、六十数名のボランティアに協力いただいた。西坂公園の方は南地区に依頼し、地区長はじめ、六十数名に協力いただいた。県営野球場での教皇ミサは、約20の担当部を設け、部の必要に応じて長崎北・中・南の地区評議会、女性部、純心大学、純心・南山高校などにボランティアをお願いし、約2千名に協力していただいた。早朝から夕刻までの長時間にわたる奉仕があってこそ教皇来崎の慶事を終了できたと心から感謝している。また、昨年2月以降から実行委員会事務局のメンバーとして奉仕してくださった信徒の方々に心から感謝したい。2月は数名でのスタートだったが、月を追うごとに数名ずつが加わり、10月になると30名ほどが手伝ってくださった。大村、出津からも来られ、午後9時過ぎまで協力くださった。その奉仕には頭が下がった。

当日11月24日の事を思い起こすとお詫びと感謝のことばしかない。準備を十分整えることができなかったことをお詫びしたい。10時頃からの大雨と雷には、どうしようかとさすがに震え上がった。受付、保安検査の段取りも十分とは言えず、場内への入場も導線の策定が不十分で、表示も適切ではなかった。アリーナ席のトイレ不足が最大の問題点だったという指摘にはお詫びするしかない。映像、進行の準備不足も否めなかった。担当業者との打ち合わせ時間が足りなかったと反省している。その他、反省すべきことは数多くあるが、典礼部、広報部、事務局の報告と反省は記録として保管しているので後日参考にしていただきたい。実行委員会は今年1月26日（日）に総括、報告の最終会議（写真）を長崎大司教館で開き、解散した。

最後に、実行委員会の委員各位に、また、当日、各会場に参加くださった方々、総計約3万4千人に心から感謝申し上げたい。数時間にも及ぶ風雨の中での奉仕と待機は、相当の苦痛だったろうと察している。教皇来崎を振り返りながら、歴史的な恵みの時を記憶と記録に残すよう努めたいと思っている。

ほしかげ

古代ギリシャ語λόγος（ロゴス）は「ことば」という意味以外にも、「理由」「理性」「原理」「言説」など様々な意味を有しており、日本語の「理（ことわり）」という語に近い部分もある。殉教者ユスティノスは、迫害する者たちの所業をἄλογον（アロゴン）「道理にかなわないこと」と表現し、あるべき道理というものを説く▲よいわざを行なう者に悪がもたらされることを、世は「不条理」と呼ぶ。逆に言えば、善人が栄え、悪人に害がもたらされることが世にとっては「条理」なのである。よいわざを行なっても自らに害が及ぶのであれば、それは「不条理」すなわち「道理にかなわない」ことであり、「道理にかなわない」ということは「正当な理由がない」ということなので、よいわざを行なう理由もない、したがって「害をこうむること」はよいわざを諦めるのに十分な理由となるのである▲ただ信仰者の理屈は別である。我々がこうむる害悪は、よいわざを諦めるのに十分で正当な理由とはなり得ない。なぜなら我々の生きるλόγος（ロゴス）とはキリストのことだからである。十字架の死に至るまで誰をも憎むことなく愛し抜いてくださったあのキリストこそが、深い絶望と悲劇の中でもよいわざを、愛を貫くことのできる信仰者の原理なのである▲キリストへの憧れがある限り、長崎の神の民が諦めることはない。迫害や原爆という不条理にあっても、我々は、愛することを諦めない。（通）

わたしたちが受けとったもの、伝えていくこと

教皇来崎からの始まり②

パンは水たまりに落ちた

福岡カトリック神学院　嘉松　宏樹

2019年11月24日 長崎県営野球場での教皇ミサ ©カトリック中央協議会

朝からどんよりと曇っていました。パラパラと降り始めたかと思ったらすぐ本降りに。稲光と雷鳴のたびに、早めに入場して雨の中を待機しておられた方々から悲鳴が上がります。シートで覆われたフィールドにみるみるうちに水が溜まっていきました。カッパを着て車椅子に乗ったまま雨に打たれている方も何人もおられました。スタンドでは少しでも屋根のある所にたくさんの人が集まっています。

打ち合わせをするステージの上はテントだらけでした。ジャングルジムのように柱が並んでいます。パパさまの席の上に用意された天蓋（てんがい）は悔しいほど小さなものでした。聖書もパンも被爆マリアも濡らせないのに、天幕にたまった水が時折勢いよく流れ落ちます。お互いの声が聞こえないほどの雨音でした。神学生やスタッフが懸命に水を掻き出していました。ローマから来た儀典長はパパさまにもカッパを用意するようにと指示を出しました。それは、この雨の中でもパパさまは必ずわたしたちと共にミサをささげるという宣言でした。

お昼頃でしょうか。雲が流れて雨も止み、明るくなってきました。ステージ裏の控室には続々と関係者が到着し始めます。三塁側に設けられた共同司式司祭団の控室もにぎわってきました。この日のために用意されたおそろいの祭服に身を包んで200名ほどの司祭が談笑しています。パパさま到着予定の15分前、人波をかき分けて入場を開始しました。秋光の中、会場中央を行列していきます。目を上げると外野スタンドの奥には聖体拝領を誘導する高校生たちが黄色い一団となっていました。朝早くから集まり、雨の中で練習し、赤い傘を手にじっとミサの始まるのを待っているのでした。

長い行列になって入堂する司祭団にバチカンからの警備員が急げ急げと言っています。予定より早くパパさまがいらしているというのです。最後の司祭が席に着くのとほぼ同時に、大歓声が上がりました。パパさまです。スクリーンに映ったパパさまを見て、会場のパパさまを探します。柔和な笑顔をたたえて、ゆっくりと場内を回り始められたお姿を見つけると会場の空気が弾けました。濡れた体を奮い立たせて多くの人が立ち上がりました。空は青く透き通っていました。

会衆用式次第に掲載された祈りを唱えている間に、ステージの裏では入堂行列の準備ができました。儀典長は少し待った後、行列開始の指示を出しました。違和感を覚えた方もおられたかもしれませんが、入祭の歌は入堂行列に伴う歌なので、厳密には行列が歌を待つことはしないのです。ミサ中の行為に伴う歌については「教皇様が歌が終わるのを待つようなことのないように」と儀典長団からも何度も強調されました。

ミサの受け答えはラテン語と日本語のやり取りを中心に準備されていました。とても難しかったと思いますが、聖歌隊の皆さまがリードしてくださったおかげで何とか会場一体での受け答えができたと思います。パパさまのお声が小さかった分、会場の皆が聞き漏らさないように懸命に耳を傾けたこともよかったのでしょう。目立たないことですが、パパさまの口元にずっとマイクを添える奉仕を、神学生が立派に果たしていました。

ことばの典礼はたくさんの言語を用いて行われました。訪日準備室から「一教区の行事ではなく教皇ミサである」ことを忘れないようにとの助言があり、聖書朗読は第一朗読が点字、第二朗読が英語、福音朗読が手話で行われました。また共同祈願はスペイン語、韓国語、タガログ語、ベトナム語を加えて多言語になりました。事前に共同祈願の本文を各国語に訳すために、東京教区、横浜教区、福岡教区の協力者が時間を割いてくださいました。典礼の中の短い一節かもしれませんが、共同祈願の意向の準備には、そのミサをささげる共同体がどのように祈っているかが現れてきます。教皇ミサは念入りに典礼文の準備が行われたため仕方がない部分もありましたが、小教区の共同祈願では「準備された原稿を読む」以上のものに仕上げていけるよう挑戦の余地があると思います。

供え物の準備が始まりました。共同司式の司祭たちに、パンの入った器が渡されていきます。共同司式司祭は、感謝の典礼の間中、パンの器を自分の手に持って聖体を聖別することになっていました。同様にカリスを持つ司祭もいました。司祭席の前にテーブルを置いてそこで聖別すれば簡単なように思いますが、儀典長団はそれを論外としました。「ミサの祭壇はひとつだけ」という明快な理由によるものでした。自分の手の中で聖別していいのなら、聖体拝領奉仕の場所まで移動する時間を節約するために、最初からそれぞれ会衆席の中に司祭の席を設けてその場で聖別と奉仕をしてはどうか、との声も上がりましたがこれも論外ということでした。共同司式司祭は主司式者の祭壇と自分との間に他の共同司式者以外のものを入れてはならないとのことでした。これも明快な理由でした。日ごろ行っている共同司式ミサで、どれほど共同司式者を位置付けて臨んでいるか強く指摘された思いでした。

共同司式司祭団にパンの入った器を渡している最中に、一つの器が地面に落ちてしまいました。器はゆがみ、パンは濡れた地面に散乱してすぐ水がしみこんでいきます。自身の不注意に腹立たしく感じながらも、聖別前でよかったと思いなおし、器と濡れたパンを拾って香部屋係に委ねました。悪い予兆でした。ミサが進んで聖体拝領のとき、今度は聖別されたパンが何枚も落ちてしまったところがあったようです。晴れ渡っていたとはいえ、床は水たまりでしたから奉仕をしていた神父様はうろたえたことでしょう。特に野外の大規模なミサでは日ごろ起こらないことが起こります。聖体拝領奉仕を終えた司祭方が器を返しに来られたテントの中では係の司祭が余った聖体を取りまとめていましたが、いつの間にか床の上に聖体が落ちていました。近くにいた神父様が気づいて拾い上げ、すぐご自身で拝領なさいました。何度も水に濡れたパンを申し訳なく悲しく思いました。

教皇ミサは本当に大きな典礼の機会です。典礼は神の救いを人にもたらし、神への賛美を神に返すキリストのわざです。見えないものが見えるしるしで表現される場です。教皇ミサは、あのミサを準備しあのミサに集まった教会がどのように神の救いを人にもたらし、神への賛美を神に返しているかを見える形で示すものとなったのです。「視聴覚の不自由な方や外国人のための案内がもっと必要だった」という反省点があるなら、わたしたちが日ごろ教会共同体をどのようにイメージしているかが見えてしまったということになります。

教会共同体の見える姿が典礼に現れます。典礼だけ美しい共同体というのはありえません。パパさまの長崎ミサはとてもよかった、との声も聞こえました。それは、たくさんのトラブルを抱えながらもなお、パパさまと共にあのミサをささげようと心を尽くした仲間がいたということです。

客人としてではなく、長い待機時間、厳しい天候、これを教皇の姿のなかで働かれたイエスと共にささげた仲間のミサだったからこそ美しさが見えたのでしょう。何度も地に落ちて濡れたパン、それは、ずぶ濡れになったわたしたちと一緒にずぶ濡れになって、共にミサをささげてくださっていることをイエスご自身がお示しになったと思えてなりません。このイエスの心を見えるものにする教会共同体を目指し続けたいと思います。

新刊良書

★すべてのいのちを守るため―教皇フランシスコ訪日講話集

2019年11月23日から26日にかけての教皇フランシスコの日本司牧訪問中に行われた10の公式スピーチに加え、旅行前のビデオメッセージ、帰途の機中での記者会見、サンピエトロ広場での一般謁見における振り返りを収録。巻末には滞日中の教皇を追った、詩人・批評家の若松英輔による特別寄稿を収載。

カトリック中央協議会、税別1100円。

司祭叙階を前にして

御手のなかで

ヨセフ　青田憲司　助祭

「神学校に行かんか」と浦上教会前の横断歩道ですれ違う瞬間ごとに、当時の主任神父様が低い声でつぶやきます。長崎に戻り、単なる好奇心からカトリックセンターでの「信仰養成講座」に通い始めた頃でした。「神学」も面白いなと少し思いました。

同じ頃、仕事で年に数回、タイのバンコクを訪れていました。たまたま道を尋ねた現地の人の胸元に十字架を見つけました。サバティカル中のタイ人司祭でした。カトリックというだけで打ち解け、親しくなりました。

気がつくと人生の半分を終えていました。自分のために生きてきた人生でした。もし残り半分が与えられるなら、他者のために、教会のために、これまでの経験を生かして働くのも悪くはないかもしれないと思い始めていました。子どもの頃、幼稚園や小学校で教えられた生き方でした。

ある日突然、「大司教様も推薦している」と告げられました。頭の中が真っ白になりました。気がつけば、数カ月後には東京の大神学院にいました。そこにはたくさんの仲間たちがいました。あっという間の6年間でした。自分の無力さを実感しました。皆さんの祈りだけが心の支えでした。今思えば、すべては御手のなかにあったのだと感じます。すべては感謝に変わります。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが皆さんとともにありますように。

略歴　1967年11月4日長崎市生まれ。浦上教会出身。80年山里中、83年長崎西高、86年西南大商学部、2003年九州大大学院経済学府（MBA）、04年高麗大韓国語教育、14年日本カトリック神学院入学。19年3月21日浦上教会で助祭叙階。

主こそはとこしえの岩（イザヤ26・4）

2020年、長崎教区内で司祭叙階の節目（70周年・プラチナ祝、60周年・ダイヤモンド祝、50周年・金祝、25周年・銀祝）を迎える司祭は次の方々。現在、教区外におられ、記念の節目を迎える長崎にゆかりのある司祭のためにも合わせてお祈りください。

プラチナ祝

祝プラチナに寄せて

フランシスコ・ザビエル　原塚 正人 神父

思えば、山口愛次郎大司教様より叙階を受けて70年。閃光のように過ぎし数多の事を思う時、一発の原子の弾に奪われた玉屋（房吉）師と我が母を。玉屋師は稀にみる逸材で東京大神学校では九州勢での守り主であられたが、玉にきずなのが背丈が低く、東京見物に大勢引率されて行くと見物はおろか、師を見失わないようにと必死になって行ったことなど、餌を与えてくれる親鳥さながらのようであられた。

休日、都心に出かけての帰路、高田の馬場まで来ると広々とした武蔵野の彼方にポツンと学校が見え、言い知れない安らぎを覚えたものである。…などなどの裡に黄昏は迫り祈りながら眠ること多き日々。（2月4日）

略歴　1923年12月6日長崎市生まれ。浦上教会出身。50年3月19日大浦天主堂で司祭叙階。同年青砂ヶ浦教会助任、51年大曽教会主任、62年平戸教会主任、71年諫早教会主任、73年黒崎教会主任、75年太田尾教会主任、83年西木場教会主任、86年土井ノ浦教会主任、88年仲知教会主任、94年馬込教会主任、2004年引退。現在、諫早市内に居住。

ダイヤモンド祝

ダイヤモンド祝いを迎えて

洗者ヨハネ　下川 英利 神父

ダイヤモンド祝いを迎えることができ、光栄に思います。ダイヤモンドという言葉の煌（きら）めきが少々面映（おもは）ゆいですが、60年を振り返る機会が与えられたことは大きな恵みです。

まず、叙階から現在まで何の取り柄もない私を生かしていただき、ご自分のお仕事の道具として忍耐強くお使いくださいましたいつくしみ深い神の愛を深く感じます。また、多くの方々に出会い、学び、祈りはもちろん、物心両面で支えられてきました。この方々のご厚情なしには今の私はありません。

人生も黄昏時ではありますが、神様と人々に感謝を込めて日々を送りたい。

略歴　1933年4月10日南松浦郡生まれ。桐教会出身。60年3月15日桐教会で司祭叙階。同年太田尾教会助任、62年大曽教会主任、71年俵町教会主任、73年カトリックセンター（司牧企画室長）、83年浦上教会主任、88年貝津教会主任、92年田平教会主任、98年中町教会主任、2005年諫早教会主任、17年引退。現在、長崎市内に居住。

ダイヤモンド祝

御ミサを捧げ、祈ります

ヤコブ　山内 豊 神父

新年の喜びとともに、思いも考えもしていなかったダイヤモンドの祝いを、喜びと複雑な気持ちで暮らしています。ダイヤモンドお祝いができることになったのは、慈愛深い神様の大きなあわれみとお恵み、また皆さんのお祈りやご支援の賜物だと深く感謝しています。

ヨブ記の「人間は母の胎から、裸で生まれ裸で帰る」という言葉を思い出し、裸で、テブラで、神様の前に立つのは、失礼きわまりない事だと思い、今生かされているのは、罪の償いと神様にお土産をたくさん用意するためだと思い頑張っています。

皆さん、どうぞ今後も変わらぬお祈りとご支援を私のためにもお願いいたします。神様があわれみと祝福を皆さんの上に豊かに与えてくださるよう御ミサを捧げて、祈ります。

略歴　1932年6月8日平戸市生まれ。田平教会出身。60年3月19日田平教会で司祭叙階。同年3月大浦司教館、同年9月三浦町教会助任、62年中町教会助任、63年玉之浦教会主任、69年鯛之浦教会主任、75年相浦教会主任、88年黒崎教会主任、95年上神崎教会主任、2002年引退。現在、平戸市内に居住。

ダイヤモンド祝

フィデリス　西山 達也 神父

略歴　コンベンツアル聖フランシスコ修道会司祭。1934年1月1日広島県呉市生まれ。47年3月18日本河内教会で受洗。同年入会。60年7月3日イタリア・アシジで司祭叙階。

62年小長井修道院、63年東京・本部修道院、66年仁川修道院、68年東村山本部修道院、70年東村山本部修道院、管区長秘書、71年修練長代行（同年11月30日まで）、73年西荻窪本部修道院長、管区長秘書、75年修練長代行、76年瀬戸修道院、瀬戸教会主任、79年ローマ派遣（総会本部勤務）、94年小長井修道院、2000年由布修道院長、02年聖母の騎士修道院、本河内教会助任、03年4月本部修道院、同年10月短期ブラジル派遣（04年1月20日まで日伯司牧手伝い）、04年大笠利教会主任代行（同年12月19日まで）、05年本部修道院、典礼書翻訳担当。17年に奄美修道院から湯江修道院へ異動、現在に至る。

1981年教皇ヨハネ・パウロ2世来日の折、教皇が日本語でメッセージを述べられるにあたり、当時バチカン放送局で日本語放送を担当していた西山師が日本語の個人指導をしたことはよく知られる。

金祝

見えない手によって導かれ

ドメニコ・ヴィタリ 神父

50年の間、さまざまな所で働き、いろいろな出来事があったのですが、何の困難もなく、見えない手によって導かれ、今日に至ったような気がいたします。

そもそもイエズス会の事を全く知らなかったのに入会したのも、実に不思議なことです。

この50年の私の働きが、どれほど役に立ったのかわかりませんが、神様がそのご意思のままに私を使われたというふうにも感じています。

その意味で私に悔いは全くなく、残っている人生を何も心配しないで生きていこうと思っております。

略歴　イエズス会司祭。1937年11月18日イタリア、マチェラタ県生まれ。58年10月6日アシジの小神学校からイエズス会入会。70年3月14日東京大司教区司教座聖堂・関口教会で司祭叙階。77年12月4日最終誓願。72～75年東京教区・麹町（聖イグナチオ）教会助任。76～91年広島教区・山口教会助任。92～98年山口島根地区の地区長、イエズス会山口修道院院長。98～2005年山口教会主任。05～07年徳山教会・下松教会主任。07～12年麹町教会主任。12～14年益田教会・津和野教会主任。14～18年幟町教会主任。18年4月から長崎・日本二十六聖人記念館館長。

銀祝

御恩を忘れず謙遜の道を

ミカエル　辻原 達也 神父

「おめでとう」と言われて気後れしてしまいます。取り柄のない人間を司祭として辛抱強くお使いくださった神様、兄弟として関わってくださった神父様方、神の家族に加えてくださった信徒の皆様に只々感謝の思いでいっぱいです。

たくさんの弱さから、数々の失敗があり、ご迷惑をおかけしました。ごめんなさい。それでも赦し、支えていただいた御恩を忘れず心に刻み、これからは謙遜の道を歩んで行けるよう、節目の年にしたいと思っています。

略歴　1967年4月3日長崎市生まれ。出津教会出身。95年3月17日浦上教会で司祭叙階。同年三浦町教会助任、98年山田教会主任、2006年長崎コレジオ（現福岡コレジオ）副院長、12年奈留教会主任、18年小ヶ倉教会主任。

人事異動・任命（教区）

（　）内は前任地

【2月12日付】

橋本　勲師　入院（黒崎小教区主任）

山脇　守師　黒崎小教区主任代行　長崎北地区長・滑石小教区主任兼務

銀祝

感謝

ペトロ　川原 拓也 神父

決して25年間何もなかったわけではなく、振り返ればたくさんのことがありましたが、それでも25年という時間はあっという間に過ぎ去ってしまいました。

たくさんお恵みを頂いたにもかかわらずたくさん失敗し、たくさんの人に心配や迷惑をかけ、たくさんの人に助けてもらいました。人生も司祭生活もあっという間に半分が過ぎてしまいました。残された半分でどれだけのお返しができるでしょうか。すべてを感謝しながらこれからも司祭として生かされていきます。

略歴　1968年3月24日長崎市生まれ。黒崎教会出身。95年3月17日浦上教会で司祭叙階。同年浦上教会助任、99年崎津・大江・本渡教会（福岡教区）助任、2005年三井楽教会主任、11年褥崎教会主任、17年桐教会主任。

またもの一歩

アンドレア　金熙一（キムヒーイル）神父

司祭になって半年後、福祉の勉強のために初めての日本での生活が始まりました。4年半の短い時間でしたが、日本管区の兄弟の皆さんの助けの下で、無事にそして色んな思い出を持って帰国することができました。

それから20年が経った今、私は稲佐山が見える所に立っています。ここで、今までどおりに神様の導きに従って、またもの一歩を踏み出します。皆様のお祈りをお願いいたします。

略歴　コンベンツアル聖フランシスコ修道会司祭。1965年9月8日釜山市生まれ。大淵（デヨン）洞教会出身。95年8月28日釜山・大淵洞教会で司祭叙階。96年日本留学（上智大学大学院）。2000年機張（キジャン）教会助任。01年同教会主任。05年在世フランシスコ会釜山地区霊的補佐。07年平和ドネーション・マーケット設立。13年韓国管区評議員。15年障害児施設・聖フランシスコの家院長。17年奄美修道院協力司祭。19年12月から聖母の騎士修道院協力司祭。

叙階式・認定式のお知らせ

叙階式

3月20日（金）10時30分

浦上教会

司祭叙階受階者

ヨセフ　青田 憲司（浦上）

助祭叙階受階者

パドアのアントニオ　西田 祐尚（まさなり）（飽の浦）

助祭・司祭候補者認定式

3月17日（火）19時

大浦天主堂〔信徒発見ミサ〕

ボナヴェントゥラ　ホン・チャンキ（大浦）

秘跡の恵み 続くこと願う

下五島地区 合同堅信式

1月19日（日）11時から福江教会で下五島地区合同堅信式が行われ、中学生16、高校生1、大人3の計20人の受堅者が高見三明大司教により堅信の秘跡を受けた。教会ごとの人数は次の通り。福江（中学生9）、奈留（中学生、高校生、大人各1）、水ノ浦（中学生2）、三井楽（大人1）、貝津（大人1）、浦頭（中学生1）、井持浦（中学生3）。

ミサでは拝領祈願後に感謝式を行い、その中で堅信証書の授与式、受堅者代表による大司教への感謝の言葉があった。式後は、教会の信徒会館でお祝いをし、喜びを皆で分かち合った。

昨年よりも受堅者が減っている中で、どの教会でも秘跡の恵みが絶えないことが願われるばかりである。

各教会の堅信式

長崎中地区の教会で、高見三明大司教を迎え堅信式が行われた。1月12日(日)浦上27人（中学生19、大人8）、2月2日(日)本原5人（中学生4、大人1）、2月9日(日)城山5人（中学生3、大人2）。また1月26日(日)は中村倫明司教の司式により植松教会で10人（中学生8、大人2）が秘跡を受けた。

橋口朝光師しのび 一年目の命日ミサ

相浦教会で祈りささげる

昨年1月13日に心筋梗塞のため急逝した橋口朝光師をしのび、1月12日（日）13時から相浦教会聖堂で命日ミサが行われた。ミサは、中村倫明補佐司教の主司式、佐世保地区長・山内 実師、平戸地区長・山村憲一師ら15人の司祭団の共同司式によって行われ、遺族の方々を含む約400人の信者が祈りをささげた。ミサ後は、教会学校を代表してハイメ花モニカさんが思い出の言葉を述べ、偲ぶ会も催された。

短信

〈NPT再検討会議に向けた動き・長崎連絡会〉

今年4月、5月開催のNPT再検討会議に合わせ、被爆者や平和団体がニューヨークで世界大会を行うことを呼びかけている。これに応えて結成された「長崎連絡会」（よびかけ人・朝長万左男氏、高見三明大司教ら計5人）が1月18日(土)13時30分から長崎被災協会館で結成の集いを行った。集いでは「教皇メッセージにこめられた核兵器廃絶への思い」と題した山内清海師（大司教館）による講演もあり、参加者は熱心に聴き入っていた。

〈第9回長崎キリスト教一致礼拝〉

キリスト教一致祈祷週間（1月18～25日）中の1月19日(日)、14時から教区諸宗教・エキュメニズム委員会と長崎キリスト教協議会の主催により、礼拝が日本基督教団・長崎銀屋町教会で行われた。今回のテーマは「人々は大変親切にしてくれた（使徒言行録28・2参照）」だった。

〈韓国の合唱団が平和の祈りコンサート〉

和解と協力、そして平和を祈ろうと、韓国のムジカサクラソウル合唱団が1月20日(月)の夜、浦上教会で特別コンサートを開催した。同合唱団は1984年の創団以来、ルネサンス時代の無伴奏多声合唱音楽を専門的に演奏してきた。当日は長崎南山小学校コーラス部も友情出演し、美しい歌声を聖堂内に響かせた。

〈司祭団マラソン大会〉

1月28日(火)下五島地区で長崎大司教区の司祭団マラソン大会が開催された。今回は大阪教区の2人の司祭も参加し大会が盛り上がった。時折雨が降る中、信者たちの応援を〝背負って〟司祭たちは頑張って走った。1位は松尾 太師（城山教会）、2位は松永 敦師（大阪教区）、3位は川原昭如師（宝亀教会）で、駅伝では長崎中地区が1位になった。マラソンによる体の健康と懇親会による心の健康につながるマラソン大会だった。

ローザ 川端ヂヤ修道女

（純心聖母会）

1月8日、聖フランシスコ病院で逝去。101歳。

1918年五島市生まれ。18歳で同会入会。40年初誓願後は、開設された修道院の奉仕に次々と派遣され、若い力で、教会のため、要理教育、保育活動など宣教のために働いた。45年終生誓願後は調理の腕前を生かし、姉妹たちや修道院を訪れる方、また、那須祈りの家での参加者に心を込めたおいしい料理を提供した。シスター特製のクッキーは「ローザクッキー」と呼ばれ、多くの人に愛された。2007年から療養生活に入り、ロザリオを手に祈りのうちに過ごしていた。1月8日早朝、体調が思わしくなく、病者の塗油を受けたのち救急車で運ばれ肺炎との診断を受けたが急変し、御父の御許に召された。

葬儀ミサ・告別式は10日、本部聖堂で行われた。

アレキシア 田代トミ修道女

（純心聖母会）

1月26日、三原台病院で逝去。93歳。

1926年佐世保市生まれ。47年同会入会。50年初誓願。59年終生誓願。初誓願後は、シスターたちで「聖ヨゼフ工場」と呼ばれる印刷業務を行っており、「聖母の騎士」再刊第1号をはじめ長崎教区の出版物などを手掛ける仕事に従事した。その手の器用さはその後の47年間、純心女子学園（長崎）の受付業務に大いに生かされた。来校された方をはじめ生徒、職員に優しい笑顔と丁寧な応対、そして自身で育てた花々を学園の聖堂をはじめ校内に生け、その柔和な姿は「受付のマリア様」と慕われた。2013年から療養生活に入ったが、これまで生きてきたように、周りの人の喜びとなる姿勢は変わらなかった。

葬儀ミサ・告別式は27日、本部聖堂で行われた。

みことばにふれて 167

ペトロ 松本

（フランシスコ会 長崎修道院）

未来を共に　～すべての人の平和を願い、すべての人の平和を祈る～

「しんぷさまぁ～。泣かないで～」。

昨年の卒園式の前日、園長先生の代役でリハーサルを終えて聖堂を出た私を、年長さんの女の子たち数人が、心配そうに取り囲み、語りかけてくれました。私の中で、子どもたちへの想い、先生方への想い、園への想いがこみ上げ、不覚にもリハーサル中に涙を流してしまっていて、それを見た子たちは心配して、私を待っていて声をかけてくれたのでした。

叙階して赴任した教会の付属幼稚園の卒園式に、新米の副園長として初めて参列した時に、保護者と先生方の愛情あふれる雰囲気に包まれ、「日本にこんな場が、まだ存在していたんだ」という驚きと懐かしさ。「こういった場を守り続けていきたい！」。あの時の心底からの思いがそれ以後の私の職務を方向づけました。少子化や親の就労、人手不足や働き方改革、司祭・修道女の減少など、日本全国でカトリック園を取り巻く状況は厳しさを増すばかりです。世の中が変わり、制度が変わり、人の生活スタイルも変化し続けていく中でも、失われてしまったらもったいないものを守り続けていくために苦労することの価値は、確かにあるはずです。そして、私たちの未来には希望が託されています。主イエスを通して示された神の普遍的救済意思は、〝滅びではなく救いの完成〟です。私たちはミサの中で祈ります「愛の完成に導いてください」と。

ある時、一人のお母さんの先生がこう言われました。「神父様にはお分かりにならないでしょうけど、全ての親が、子どもが生まれた瞬間に、世界の平和を祈るものなのですよ」と。いぶかしげな顔をする私に、言葉を続けて、「今までは、自分本位、自分中心で生きてきたけれど、新たな命の誕生で、この子の将来を考える。この子が育っていく世界がすさんだもの、生きがたいものではありませんように。この子が生きる未来が、苛烈なものではありませんように、と祈るものなんです。それは、未来の世界の平和を願い、祈ることでしょう」と。確かに若くして修道院に入ってしまった私には、「相続する」とか「継承する」とか、「誰かの将来のために今を頑張る」とかいう感覚が薄いのかもしれない。自分が自分を全うすることに集中しすぎてしまっているかもしれない。そんなことを考えさせられました。

「しんぷさま　泣かないで～」と、私の周りを取り囲んだ子どもたちに、伝えました。

「みんなは、悲しかった時、怖かった時、痛かった時に、泣いたでしょう。今、しんぷさまは、みんなの立派になった姿を見て、うれしくて、誇らしくて、幸せで、涙が出てきてるの。人は、心からうれしい時、幸せな時にも涙がでるんだよ。みんなも、大きくなって、幸せな涙を、何回も流せるようになれたらいいなって、みんなのこと、お祈りしているからね」。

小さな子どもたちとのかかわりは、現在の自分に凝り固まってしまう想いを、未来へと向けてくれます。そして、世の親と共に、祈り願う者としてくれます。

「この子たちが育っていく未来が、祝福に満ちたものでありますように」と。

今年も、この3月に、たくさんの子どもたちがカトリック園・学校を巣立っていくのでしょう。子どもたちは、私たちの未来です。

ぶどう園

▼「性虐待被害者のための祈りと償いの日」の集い　3月13日(金)西坂・聖フィリッポ教会。【昼の部】12時45分～16時30分【夜の部】17時～20時 ※別途、ゆるしの秘跡の時間あり。詳細は小教区配布のポスターを確認。問合先・長崎教区子どもと女性の人権相談室 TEL 095-865-7829

▼キアラ・ルービック生誕100周年を祝う集い　3月15日(日)13時から受付、13時30分プログラム、15時記念ミサ（司式・高見三明大司教）。カトリックセンター・ホール。フォコラーレ主催。

▼日本の信徒発見の聖母記念ミサ　3月17日(火)19時、大浦天主堂。ミサの中で助祭・司祭候補者認定式が行われます。

▼長崎地区高校生黙想会　3月29日(日)13時～17時、長崎大司教館。参加費千円。筆記用具、祈祷書、ベールを持参ください。教区青少年委員会主催。

感謝

―寄付―

長崎大司教区
●イエズス聖心侍女会様

―香典返し―

長崎カトリック神学院
●永尾ツナ様（黒崎）
故ペトロ永尾 來（たすく）様

右の方々からご寄付・ご芳志を賜りました。お礼とご報告を申し上げます。

CALIS Catholic Life Service

カリス通信 No.3

地震に対する備えとして「地震保険」をお勧めします

地震は日本のどこでも発生する可能性があり、大きな地震が発生すると多くの人命や財産が失われます。日本が世界有数の地震国といわれるのは、主に以下の理由があります。

〈プレートによって発生する地震〉

日本列島は4つのプレートに囲まれ、世界で発生するマグニチュード6以上の地震の約20%が日本付近で発生しています。地球の表面は、岩石でできたプレートに覆われ、プレートが毎年少しずつ動き、プレート同士の重なり等により、かかった力が解放され地震が発生します。これを「プレート境界型地震」といいます。このうち陸と海側のプレートが重なり、発生する地震を「海溝型地震」といい、地震に加え、津波発生の可能性があります。

〈活断層によって発生する地震〉

プレート同士が押し合い続けていると、地表近くの岩盤に割れ目が生じ、これにより地震が発生する場合があります。これを「内陸型地震」といい、過去から繰り返し活動し、将来も地震が発生する可能性がある割れ目を「活断層」といいます。日本には、活断層が2,000ケ所くらいあるといわれております。

〈地震に対する保険について〉

地震を補償する保険は、居住用の建物に対する家計地震保険と、居住以外の建物に対する企業地震保険があり、いずれも火災保険のオプションとなります。

〈カリスの年度別・家計地震保険の付帯率〉

	カリス			家計地震保険全体(※)
	2017年度	2018年度	2019年度	2018年度
家計地震保険付帯率	36.4%	35.6%	33.0%	65.2%

(※) 損害保険料率算出機構「地震保険統計速報 地震保険付帯率」から出典

カリスの付帯率は、家計地震保険全体(※)の付帯率と比べると、かなり低い水準です。熊本地震の際には、直ちに、ご加入のお客様を確認し、被害状況の連絡、直接現地を訪問し、被害の確認とお見舞いを行いました。被害に遭われたお客様から「地震発生後直ちに飛んできてくださり感謝します」とのお声をいただきました。家計地震保険へのご加入をお勧めいたします。ご連絡いただければ直ちに見積りをお送りいたします。

私たちが、お守りいたします。
服部秀昭　大水文隆 神父（顧問）　杉谷英一
三條貴英　春田照美　毛利玲子

カトリック共済システム 有限会社 カリス
〒135-8585 東京都江東区潮見 2-10-10 日本カトリック会館　TEL：03-5632-4449　FAX：03-5632-4468
連絡先 0120-77-0033 http://www.calis.co.jp/
リスク・補償に関して何なりとお気軽にお問い合わせください
19-TC03967